インタビュー 海老沼 順子氏（樹木医 海老沼 正幸氏夫人）

2023年6月3日　海老沼邸にて
インタビュアー：宮島達男

宮島　今日の昼間、海老沼先生に柿の木プロジェクトでのこれまでついて、インタビューさせていただきました。その中で先生が、柿の木プロジェクトを続けているのは、もちろん平和を願っているということがあるけれど、それ以外にひとつ大きな理由がある、と。それは順子さんが被爆2世だということ。被爆柿の木から種を採取して育てた苗木が「家内と同じ2世なんだ」「それなら、ちゃんと育てて世の中に広めなくてはならないな」という思いがあったという話を、初めて語られたんです。今まではおっしゃらなかったんですけど。

海老沼　そうなんですか…そうなんだ。私たちは被爆2世で、親が被爆者でしょ？でもそれは、やっぱり本人たちはあんまり話したがらなかったし、その子どもである私たちには「絶対に話したらダメ」と、決して口に出してはいけないと言っていました。なんか昔は、偏見で見られていたというのがあって、だから、隠しとおしていたわけね。今でもやっぱり、実際に被爆した人は、語らない人が多いかもしれないですね。

どうにか最近、最近というか、柿の木プロジェクトが始まったころから、被爆2世の会など色々な動きが出てきて、「あっ、みんな話すようになったんだな」と感じました。

宮島　柿の木プロジェクトを始めて28年が経ちました。28年続けてこられたのは、海老沼先生もご苦労なさったけれど、支えていた順子さんの力があったからこそだと、僕らは思っているんです。本当に感謝しております。

海老沼　ありがとうございます。とんでもないです。

宮島　28年間続けてこられて、何か思うことはありますか？

海老沼　ある。それはね、続けてこられたのは私たちだけの力ではないということ。全部、宮島先生との出会いから始まったことで。たぶんね、私たちだけだったら何年かでもう終わっていたと思う。これだけ世界に広がったのは、宮島先生のおかげだと思うんです。

宮島　皆さんの、ね。

海老沼　いろいろな人、今ここにいるスタッフの人たちも、今まで手伝ってくれた実行委員の人とか、いろいろな人の力があって広まっていったんだなと思うの。でも、今日こうやって話せたことをいい機会と思って、生きている限りはやっていきたいし、1年に1回でもどっかに植えられたらいい。みんなでやっていきたいなと思っています。

宮島　これからも少しずつ、頑張ってまいります。

海老沼　ちょっとしたきっかけで、広がってくれたらなって。私も頑張って生きていきます、生きている限りは頑張ります。

宮島　宜しくお願いします。

海老沼　こちらこそ、宜しくお願いします。

●えびぬまじゅんこ

1956年9月21日　長崎市生まれ。爆心地から1.5 kmの若草町（旧・城山町）に被爆2世として育つ。79年に海老沼正幸氏と結婚し、一男一女を育てながら、海老沼造園の現場を支え続けてきた。
柿の木プロジェクトでは、長崎における事務作業を一手に担っている。

左から海老沼正幸氏、海老沼順子さん